

## フィリピン中部台風被害

国際救援課長 池田 載子

2013年11月に、フィリピンを超大型台風「ヨランダ」が直撃しました。台風慣れしているフィリピンの人でさえ、「ヨランダはひどかった」と口をそろえて言っていました。強風により6~8m級の高波が襲ったことが被害を拡大し、特にレイテ島のタクロバン周辺はスラム街でもあり、壊滅的な被害を受けました。皆さんもテレビでご覧になったように、治安も非常に悪化したようです。日赤はセブ島の北部のダンバンタヤン郡、マヤ地区にERU（緊急対応ユニット）を送り、医療活動を約3か月間にわたって実施してきました。私は、第2班から第3班にまたがって活動していました。



日赤クリニック

今回の活動は、今までと異なる点がいくつかありました。第一に、フィリピン自体が比較的、国力がある国だったということです。災害時に国際的な緊急救援を要請する国は、開発途上国が多く、自国だけでは災害に対応することができません。災害以前の健康状態も悪く、医療システムも脆弱なことがほとんどです。しかし今回は、復興速度が非常に速いことを現地で実感した初めての経験でした。余談ですが、現地での私たちの生活は、電気（発電機ではなく電線から供給されている！）も、温かい！シャワーもあるという文化的なもので、私の災害時の派遣経験の中でベスト1でした。もちろん第1班は、かなり過酷な生活だったようですが。



火傷の子供が多く、スタッフと一緒に処置

第二に、第1班から巡回診療に伴って、公衆衛生活動を積極的に実施したことです。災害時の活動は、緊急医療が中心のようなイメージがあるかもしれませんが、感染症などの予防のための公衆衛生活動は必須です。現地のバランガイ（日本の区）ヘルスワーカーさんを対象に傷、火傷の手当の方法や高血圧など



巡回診療は村の集会所で

の生活習慣病の予防などのトレーニングを行いました。バランガイヘルスワーカーさんは、トレーニング内容を地元住民に対して普及していくのです。フィリピンの現地医療従事者の人たちからの全面的協力も得ることができ、非常に効果的な活動が実施できたと思います。

第三に、こころのケア専門要員が第1班から活動し、特に子供たちへのこころのケア活動が行われ、徐々に子供たちの笑顔が戻ってきて、私たちのこころの癒しにもなっていました。

もともと日赤は、フィリピンと二国間事業の地域保健事業を行ってきました。今回の台風への緊急救援だけでなく、その復興に向けて継続的支援が行われる予定です。

「最近、日本にいないよね」と言われることも度々です。今回も急な派遣要請だったのですが、職場の皆様にも本当に快く送り出していただきました。また、いつも感じることですが、私たち赤十字の活動は、赤十字を支援してくださる方々に支えられています。今後も、赤十字に寄せられる期待に恥じないような活動を行っていきたいと思っています。



現地のヘルスワーカーさんに  
保健衛生教育を行う